

二〇一六（平成二十八）年夏のリオデジヤネイロオリンピックで、日本の柔道男子チームは七階級すべてでメダルを獲得した。前回大会の成績を大幅に超える快挙だった。このチームを率いた監督が、井上康生である。

康生は、それまでの柔道の指導方法を見直し、科学的なトレーニングや栄養学の成果を取り入れるとともに、精神面での強さを鍛える指導を重視した。それは、選手として、多くの喜びや苦しみを味わってきた彼自身の経験に基づく指導だった。

「お父さん、僕は柔道をするために生まれてきたと思う。柔道で世界一になりたい。」

小学校四年生のとき、宮崎県の大会で優勝した康生が、指導者でもある父に言った言葉だ。父の練習をいつも見ていた康生は、自分から柔道を習いたがった。けっして体の大きいほうではない父が、自分より大きな選手を投げ飛ばす姿に憧れていたのだ。

（僕も柔道をやりたい。お父さんみたいに強くなりたい。）

こうして、康生の柔道人生が始まった。それまでの康生は、とても泣き虫だった。しかし柔道を始めてからは、人が変わったかのような強さを見せ始めた。周りが心配するほど練習にのめり込む。康生は、柔道が楽しくてしかたがなかったのである。五年生のときに全国大会で初優勝。中学生になつてからはさらに強さを増し、神奈川県の高校に進学してからも、数々の大会で優勝した。

大学に入つてすぐに日本一になると、アジア大会でもみごとな優勝。鮮やかな一本勝ちで勝ち進む康生の名は広く知られるようになり、世界一も確実だと誰もが確信していた。

ところが、一九九九年一月、大学二年生のある大会でのことである。

「一本！」

主審の手が、相手選手に挙げた。康生は、初戦で負けてしまったのだ。これまで厳しい練習をしてきただけに、ぼうぜんとするしかなかった。そして、別の大会でも一本負け。畳にたたきつけられる、完全な負けだった。敗者復活戦を経て三位になったものの、試合内容の悪さが康生を打ちのめした。

（今まで、どうやって勝っていたんだ。）

康生は、負けた原因を考え、守りの弱さを克服するために練習でさまざまな方法を試した。しかし、いくら考えても何をやっても、すぐには結果が出なかった。

（自分の柔道のすべてが間違っていたのか？ 自分のめざす柔道が、わからない。）

勝つことへのあせりが募る一方で、いくら練習しても、畳の上の康生は、輝きを取り戻すことができなかった。

そんな折、一九九九年六月のある日、練習を終えたばかりの康生に、家族から電話がかかってきた。

「……お母さんがなくなった。」

とつぜんの知らせで、体中の力が抜けた。

(うそだ……。)

宮崎の実家にいた母は、康生の不調をいつも心配していた。宮崎に帰った康生は、まるで眠っているかのような母と対面した。一昨日、電話で話したばかりだった。

「頑張つて。応援しているよ。また栄養のある食べ物を送るね。」

優しい母の言葉が、耳にはっきりと残っている。ただただ泣き崩れるしかなかった。

母の葬儀を終えたあと、父があるものを康生に手渡した。

「お母さんが、おまえに送る荷物に入れ忘れたものだ。」

母からの手紙である。康生は母の遺影の前で手紙を読んだ。そこには、康生の体を気遣う言葉があふれていた。そして、ある一行に目が留まった。

『――すべて初心に返って頑張ってください。』

(初心……。)

康生は、母から初めて言われたこの言葉の意味を考え続けた。不調に苦しむ今、勝たなければいけないというあせりを感じていた。しかし、もともとは純粋に柔道が好きで、ただ強くなりたいから、世界一になりたいから柔道を続けてきたのではないか。

今にも語りかけてくるような母の美しい顔を見ながら、康生は心の中で答えた。

(お母さん。これからの康生を見てください。)

康生が大学に戻った直後に行われた団体戦の大会では、残念ながら優勝を逃した。しかし、康生の気持ちは吹っ切れていた。その後も母の言葉を胸に、柔道を始めた頃を思い出しながら、練習でさまざまな方法を試し続けた。

そして、その年の十月。イギリスでの世界選手権大会で、康生はみごとに金メダルを獲得した。そこには、もがき苦しんでいたときは違う康生がいた。

二〇〇〇年夏、シドニーオリンピック。康生は、初戦からすべて一本勝ちで勝ち上がった。決勝の相手は康生の技をよく研究していたが、それでも康生の勢いを止められなかった。開始後二分九秒、鮮やかに得意の内股を決めた。金メダルを決めた瞬間だった。

表彰台は母と一緒にだった。メダルを掛けられたあと、康生はウェアの中に大切に持っていた母の遺影を取り出し、高々と掲げたのである。それは、大切なことを教えてくれた母への恩返しでもあった。